

健康教育研究 (VI)
高浜小学校における健康教育の実践研究 (2)
— 学校保健委員会活動の事例を中心に —

山本 万喜雄¹⁾

東 幸恵²⁾

A Practical Study of Health Education in Takahama Elementary School (2)
— The Case of School Health Committee Activity —

Makio Yamamoto¹ and Yukie Higashi²

Key words : health education, Takahama elementary school, health committee activity

(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education,
Ehime University, 7, 87-94, March, 2010)

キーワード: 健康教育, 高浜小学校, 学校保健委員会活動

はじめに

子どもが主人公の学校保健委員会の活動を活性化し、子どもの健康認識をどう育てるか、子どもの健康を守り育てる学校保健の今日的課題の一つである。本研究では、昨年(2008年)に引き続き、松山市立高浜小学校を舞台にして、養護教諭と健康教育の研究者が協働しながら健康認識の育成を図るとともに、学校保健委員会活動の活性化の試みを展開しようとした。本稿は、その実践報告である。

第一章 学校保健委員会の組織づくり

～転任1年目の取組～

学校保健委員会とは、学校における健康問題を研究協議し、健康づくりを推進する組織である。そのためには、学校保健委員会をその中核的な組織として機能させる必要がある。学校と家庭が、ともに取り組んでいくために、子どもたちの実態に応じた健康問題を発見しようと考えた。また、子どもたち自身の健康認識

を高めることも必要だと感じた。そこで、2008年は、学校保健委員会の組織づくりに取り組んだ。

なお、昨年度の取組は愛媛大学教育実践総合センター紀要¹⁾にまとめ、その成果の一部を愛媛県保健主事研修会²⁾(2009.10.27)で報告し、今年度の取組につないでいった。第一章では、紀要の要約を載せる。

1 子どもの実態把握と健康問題の発見

児童が抱える健康問題を発見するためには、健康状態を把握する必要がある。そこで、欠席や来室状況の集計・分析及び「体と心の健康調べ」を実施し、その把握に努めた。

その結果、多くの児童が腹痛を抱え、その原因が、朝の排便習慣が身に付いていないことが分かった。そこで、次の3点を子どもたちに学ばせたいと考えた。

- ① 朝の排便習慣を身に付けさせること。
- ② 腹痛時に、自分でできる手当てを身に付けるさせること。(おなかのマッサージ)。
- ③ 排泄の大切さを理解させること。

1) 愛媛大学教育学部
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番
2) 松山市立高浜小学校
〒791-8082 愛媛県松山市梅津寺町1352-2

1. Faculty of Education, Ehime University,
Bunkyo-cho 3, Matsuyama-shi, Ehime,
〒790-8577, Japan
2. Takahama Elementary School,
Baishinji-cho 1352-2, Matsuyama-shi, Ehime,
〒791-8082, Japan

2 学校保健委員会の実際

昨年は、上述した健康問題を取り入れた劇と「排泄の大切さ」についての講演を計画した。講師について、家庭教育部の保護者に相談すると、山本が良いとの要望が出た。実は、東も、前任校で山本に講演を依頼し、子どもたちの健康認識を高められた成果があったので、保護者の要望と意見が一致した。管理職の了承を得た後、山本に講演を依頼し、快諾を得た。

講師との打合せでは、まず、本校児童の健康問題と子どもたちに身に付けてもらいたいことを伝えた。次に、実態を知ってもらうため、保健だよりや子どもの健康状態が分かる資料を送付した。それと同時に、健康委員会の発表が、講演につながる内容になるよう、シナリオづくりに取り組んだ。劇は、ある一人の児童が腹痛を訴えて保健室を来室し、腹痛の原因と手当てについて保健指導を行い、排便後、教室に復帰する場面で終わる。そして、司会が、排便リズムを身につけることや排泄の大切さについて、講師から話を聞いてみようと呼びかけて、講演につなげた。

本番に向けて、練習を行ったが、それ以外でも、昼休みに数人で集まって自主練習をしたり、家庭で保護者に聞いてもらったりしていたようである。その練習の成果が発揮され、本番では演じる方も見る方も真剣にできていた。この劇の後、保健室において、健康委員会児童以外の6年生が、腹痛を訴えて来室してきた下級生に「時計回りにおなかをさするといいんよ」と言いながらさすってあげる等の言動の変化が見られるようになった。これらの取組を通して、健康委員会活動の活性化によって、健康委員会児童の自覚が深まることを実感した。また、劇にして表現することで、他の児童の興味・関心を高められ、理解しやすいことも分かった。しかし、健康委員会の児童が、より意欲的かつ積極的に活動するためには、どのような取組があるかが課題に残った。

3 担任・児童・保護者とつながり合う保健だより

本校では、児童用と保護者用に分けて保健だよりを作成している。

まず、児童用保健だよりについて述べる。保健室に痛みを訴えて来室した児童には、個別に保健指導ができる。しかし、全校児童を対象にした保健指導となると難しい。そこで、全校に配布する保健だよりに、本校の健康問題と解決方法に関する記事を載せた。そして、配布時に、学級担任から保健だよりの内容に沿って、学級指導を行うよう依頼した。こうすることで、

朝の会において、学級担任の先生が、児童に指導する声が聞こえるようになり、教職員の共通理解を図りながら、全校への一斉指導ができた。また、教職員には、月1回開催される生徒指導部会や職員会議等で、児童の健康状態を集計・分析した資料を配布している。その際、本校児童が抱える健康問題の解決に必要な指導（例えば、問診時に必要な体の様子を伝える言葉等）を依頼しているので、学校全体で健康づくりに取り組むことができている。その結果、問診や保健指導がスムーズにできるようになった。

保護者には、本校児童の実態に応じた健康問題解決に関する記事（例えば、朝一杯の水を飲むと、排便がしやすくなる等）を載せて、家庭における健康教育への協力を呼びかけている。その結果、参観日等で会った際「朝、一杯のお水を飲んで、家族みんなで便秘解消に取り組んでいます」「保健だよりを読んで、相談しようと思って来たんですが……」といった保護者の声が聞こえるようになった。

これらの成果が見られるようになった保健だよりだが、山本が作成している授業通信を読み、養護教諭からの一方通行になりがちであることに気付かされた。そこには、授業に関する学生の感想や賛成論、反対論まで載せてあり、ちょっとしたスペースに、学生が描いたイラストがあり、場を和ませていた。そして、山本から作成までの経緯と意義を聞いた。その話によると、最初は3～4枚のプリントを手書きで作成していたが、やがて、学生の文字に注目し、授業後の感想の中から授業の全体が分かるものを選び、1枚のプリントの中に構成して作成する方法に切り替えたという。プリントから「学生一人ひとりを大事にしたい」という山本の願いを形にした「授業通信による対話の教育」を学んだ。さらに、他の学生の考え＝個性に触れることで、互いに認め合い、響き合わせる、いわば「他者からの学び」が含まれていることも理解し、それらを保健だよりに生かしたいと考えた。しかし、養護教諭が、ある一定集団に保健指導をする機会は少なく、そのため、一人ひとりに文章を書かせるとなると難しい。そこで、まずは、児童が取り組みやすいイラストを載せることから始めた。すると、児童の絵が載ることで、雰囲気柔らかくなり、読みやすいものになった。さらに、このことを続けているうちに、健康委員会児童以外でも「イラストないですか？」と描きに来る児童が増えてきた。それを担任に伝え、児童の様子を保健室まで見に来たのである。それがきっかけとなり、その児童のことを話すようになり、新たな情報が得られる（＝児童理解）とともに学級担任との連携も深まった。また、イラストを描いた児童の保護者とは「今

月号は、お子さんの絵が載っていますよ」と話す。「そうなんですか？家では学校のことをあまり話さないのですね。読んでみますね」とか「お子さんは、絵を描くのが好きなんですね」と聞くと「うちでも、しょっちゅう、漫画ばかり描いているんですよ」といった会話が弾むようになった。

この取組を通して、保健だよりの作成に、児童が関わることで、その児童とはもちろん、学級担任や保護者とつながり合っていけることを実感した。

第二章 健康委員会児童の組織づくり

～2年目の取組～

今年度は、昨年度の課題と新たに見えてきた子どもの健康問題に着目して取り組んだ。

1 子どもが主体となった学校保健委員会

(1)健康問題をつかむ

学校保健委員会の企画・運営のためには健康問題、すなわち「今、目の前の子どもたちに、何が重要か」を発見することが重要である。そのためには、日々接する子どもたちの言動の変化に気付くことが必要である。そこで、東が、この変化を捉えるために心がけているのは次の3つである。

- ① 体の変化（表情や声の調子、しぐさ等）
- ② 痛い部位の確認（痛みの原因、場所が一定かどうか、痛みの状態等）
- ③ 暮らしの変化（両親の離婚、親の失業、友人関係、生活リズム等）である。

これらに着目して対応した結果、クラスメイトにたたかれたり、けられたりしてできた打撲が増加していること分かった。問診で暴力をふるった理由を聞くと、ほとんどの児童が、嫌なことを言われ、つい、たたいたり、けったりしたと話した。子どもたちの中で、言葉によるトラブルが多くなったことから「言葉の使い方」について全教職員で指導していく必要があると感じ、今年度の学校保健委員会の健康問題に取り上げた。

(2)解決方法を考える

健康委員会児童が、より意欲的・積極的に取組めるよう(1)で発見した健康問題の解決方法を自分たちで考えさせた。その際、まず、考えたことをプリントに記入する時間を設けて発表させた。書くことで、真剣に考えることができたようである。また、記入の段階では、よく分からないと言って書けなかった児童も、様々な意見の発表を聞く中で、書けるようになった。そして、様々な意見が出る中で、次の4つに解決方法

を絞ることができた。

- ① 人の顔や体のことについて悪口を言わない。
- ② ケンカに気付いたら、まわりの人が止める。
- ③ いやなことを言われたら、先生やおうちの人、友だちに相談する。
- ④ いやなことを言われても、相手にしない。

「自分だったらどうするだろう」と、一生懸命考えて発表する子どもたちの姿を見る貴重な時間になった。

(3)発表形式を考える

次に、(2)で考えた解決方法を、参加者に分かりやすく伝えるためには、どのような発表形式がよいか考えた。その結果、次の3つの提案が出た。

- ① アナウンサーになって、ニュース風に健康問題を伝える。
- ② ペープサートで、けんかになる原因を伝える。
- ③ 新聞を作って、見るだけでは分かりにくい人のために、読んで分かるようにする。

これらの意見は、総合の時間等を通して、子どもたちが学習していたので、スムーズに出てきた。上記以外でも、劇をする、壁新聞を作る等の意見も出ていた。

(4)実際の取組

解決方法と発表形式が決まったところで、まずはじめに新聞のタイトルを考えた。それぞれが、発表していく中で、いくつかのタイトル案が板書された黒板を見ながら「あれとあれを組み合わせたらいいんじゃない？」と提案し、それが採用され「心のヒーロー新聞」に決まった。このことから、委員会の児童が、周りの意見に耳を傾けていると感じた。

新聞記事の内容は、児童が提出したプリントをまとめたものを手書きで作成し、パソコン文字で味気なく、硬いイメージにならないよう心がけた。

次に、役割分担と準備物の作成に取りかかった。ペープサートはもちろん、体育館に掲示するプログラムや垂れ幕も、すべて健康委員会児童の手作りによる学校保健委員会を開催することができた。これらは、参加した児童・教職員・保護者の関心を引くとともに、手書きの良さ・温かさを感じさせ、場を和ませていた。

準備が整うと、昼休みを利用して発表練習を開始した。そして、練習日は、給食当番以外の児童が、5分前に集合する等、とても意欲的な態度を見せた。中でも、ペープサート役の児童は、練習の時から役になりきり、感情を込めて発表していたため、観客の反応も良かった。しかし、本番では、声が小さく、人に聞かす技術がまだ身に付いていないことを実感した。

開催後は、当日を振り返って反省を行い、次につな

げた。それぞれが記入した感想用紙を見ると、役割を果たせたことへの充実感が記入されていた。

2 健康委員会発表への反応

ここで、健康委員会発表への反応を載せる。

(1) 5年生

- ・ ペープサートで行った劇は、自分たちの手作りで上手でした。とっても楽しかったです。いすに座って、ニュースみたいに話していたのも楽しかったです。健康委員会の発表を聞いて、人の悪口を言ったりすると、人が傷ついてけんかになることがよく分かりました。劇などで説明してくれたので、詳しく分かって良かったです。
- ・ 劇はよくがんばっていたと思います。ペープサートまで作ってすごかったです。言葉は気をつけないといけないと思ったし、友達は大切だなあと思いました。楽しく学べて良かったです。
- ・ 先生が、一学期から言っていた「いじめをしたらいけない」という劇をしてくださいました。その劇が、とても心に残って良かったです。もし、いじめられたら先生やおうちの人に相談するのも忘れないようにしておきたいです。

(2) 6年生

- ・ ペープサートでの出来事は、よくあることだと少し思いました。そういうことが口げんかから、暴力げんかになっていくことも、よくあることです。でも、それを言う前に、それを言うと相手が傷つかないか考えると、保健室で調べたよくあるけがの1位打撲は防ぐことができます。だから、これから友達と話す時は、その言葉を言って、相手が傷つかないか、相手の立場に立って考えて発言したいです。
- ・ 私は、この発表を聞いて、自分もこのようなことをしたことがあり、されたこともあり、とても身近な事を取り上げて発表してくれたので、分かりやすかったです。私は、人がいじめられていても、無視して注意できません。自分では、いけないことだということ、間違っていること、注意しなくてはいけないということは分かっていますが、注意できません。私は、この発表を聞いて、発表に出てきた注意のできる子になりたいなと思いました。

(3) 教職員の感想

- ・ 内容は本校の実態に合っていて良かった。
- ・ どの子もよく頑張っていた。
- ・ 言葉づかいについて啓発して良かった。

中には、このような反応も見られた。

- ・ 声が小さかった。
- ・ 一生懸命発表していたが、全般に声が小さかった。
- ・ 一人一人の児童が自分の役割を果たそうと頑張っているのがよく分かった。ただ、声の大きさも含め、相手に聞かせる技能が十分身に付いていないように思われる。
- ・ 後半の資料が分かりにくかった。

(4) 保護者の感想

- ・ 子どもたちの一生懸命さは伝わってきました。
- ・ 子どもは頑張っていたと思う。全体的には良かった。
- ・ いじめの解決方法など参考になった。
- ・ よく考えて発表していた。
- ・ 味のある字が、子どもらしく良かったと思う。しかし、このような意見も見られた。
- ・ 声が聞きづらく全体が分かりにくかったし、もう少し丁寧にしてほしい。
- ・ 声が聞き取りにくいこともあり、十分に理解できなかった。

(5) 感想から見えてきたこと

自分たちが抱える健康問題をペープサートで示すことで、身近に感じ、分かりやすかったようである。

男女別に、違いがあったように思う。それは、男子が、自分自身のことを振り返って反省しているのに対し、女子は、友達がこのような目に遭っていたら、助けたいと相手のことまで考えられていたことである。

3 子どもの健康認識を育てる働きかけ（講演より）

ワクワク健康委員会のペープサートのよさは、次の3つである。

- ① いま保健室で問題になっていることをテーマにしたこと。
- ② 事例の物語化
- ③ その解決法を仲間と一緒に考えたこと。

さて、講演では5・6年生の抱えている悩みを、どのようにすれば生きるバネにすることができるか、そこから考えた。6年生とは出会っているが、5年生とは初めての出会いである。そこで自己紹介をした後、昨年と同様、手遊びから始め、皮膚感覚の話を、そして頭の体操をした。

導入の「この動物なに？」では、子どもと親たちに自由に発言してもらい、養護教諭が板書した。いろ

いゝ動物の名前が出てくるがなかなかあたらない。
この動物は、実はブタの頭骨。ここで大切なことを2
つ発言した。

① 自由にもものが言える関係

② 間違ふことは真実を知りたいこと。

会場全体を包んだこの驚き、好奇心こそ学びには大
事なのである。こうしているうちに、からだも心もや
わらかくなった。これからが本番である。

1) たのしく、元気に、リズムよく～健康づくり～

(1) 「みんな うんち」

6年生には復習の意を込めて、絵本『うんこダスマ
ン』を朗読した。ここでの要点は次の3つである。

① さわやかな目覚めー光刺激、睡眠のリズム

② 食事がおいしいー空腹感、朝のお手伝い

③ 便意があればすぐトイレー蠕動運動、条件反射

(2) 眠れない

- ・ 勉強への不安ー塾通い、宿題
- ・ 友達との関係ー悪口、いじめ、シカト
- ・ ゲームなどで頭が冴えてなかなか眠れない
- ・ 親の小言 詩「早くしなさい」の朗読
- ・ 車や飛行機などの騒音、環境問題

(3) 健康のパロメーター

- ・ 五快ー快食、快眠、快便、快動、快笑 とりわけ
笑い、心のパロメーター
- ・ 微症状の変化の発見には、いつもの様子、それ
も良好な状態をよく知っておくことが大事である。

(4) 病むことも人間を育てる

- ・ 病気やけがのとき、やさしくしてもらえる (甘
え)。
- ・ そんな経験があれば、人のやさしさがよくわか
る。
- ・ 人生、一休みが必要。ただ大人の場合、生活費
と社会保障の問題がある。

2) 子どもたちのイライラ 親のイライラ

(1) からだの変化ー前思春期

- ・ 身長が伸び始める。からだのふくらみー二次性
徴
- ・ 自分くずしと自分づくりのときー親の敷いたレ
ールを壊し、自分のレールを敷こうとする。それ
故、親の思い通りには動かないことも多くなる。
- ・ 「ご飯できたよー」と呼ばれてもすぐには動か
ない。

(2) トラブル続き

- ・ ケンカができる対等の関係、ケンカ (自己主張)
そのものは大事なこと。

・ 距離のとり方がよくわからない。

・ 友だちにも気遣い (疲れる)

・ うまくいかないときたたり、けつとばすこと
がある。

(3) やる気ー自らスイッチが押せる。

やる気の土台は、次の3つである。

① 「人間のよさ」体験～あたたかさ、守ってくれ
る。

② 心のエネルギー～安心感、楽しみ、認められる。

③ 社会生活の技法～あいさつ、折り合いをつける
(まあいいか)。

3) 日々の悩みをバネにして 一悩みは生きている 証ー

(1) 悪態をつく

髪の手入れが長くなる～他人の目を気にする。

(2) キレる

・ どうしたの? どうしたいの?

・ その時、①人に当たる、②物に当たる、③言葉
の力で抑制する (話す、書く)

(3) ストレス解消法

・ 中学校の保健体育教科書には適応機制が載って
おり、このことは中学校で学ぶことになっている。

(4) よく寝ること

(5) 表現すること～娘が小5の時書いた家族新聞～
失敗は成長のもと、日々の悩みを日々のバネにして
生きていこう。上のような話を聞いた後、子どもたち
や参加者はどう受け止めたか、その反応を次に示す。

4 講演「生きるよろこびパート2」と参加者の反応

(1) 5年生の感想

・ 手遊びに興味をもちました。あの手遊びは両方の
脳を使うので、脳にとっては良い運動になると思
います。それに、私は、初めて本物の骨を見ました。
でも、まさか、あれがブタのほねだとは思いません
でした。

・ 私は、いつもいらついたら物にあたりたり、ぶつ
ぶつ文句を言うことがたくさんあります。お母さん
にも反抗したりしてしまいます。でも、それは、思
春期に近づいていたせいでした。他にもいろいろな
ことを教えてもらい、良い勉強になりました。この
話の中に「月経」の話が出てきました。だいたい
は知っているのですが、もっとしっかり分かってお
きたいなと思いました。家に帰ってお母さんと今日
のことを話しました。お母さんは、何が原因なのか考
えないといけなと言っていました。私は、それを

聞いて納得できました。何が原因なのかということで、話が変わります。そのことを考えて、これからしていきたいと思います。今日の話をしたことで、お母さんとも分かり合えることができて良かったです。

- ・ 僕は、この話を聞いて、僕も中学生になったら反抗期になるんだということが詳しく分かったし、僕たちは、もうすぐ思春期を迎えて第二の成長をして、のど仏が出たり、声変わりをしたりするんだと思いました。
- ・ 思春期や反抗期のことがよく分かりました。私の家でもお母さんによく怒られますが、それは私たちのことを心配して言ってくれているんだなあと思いました。だから、私も、お母さんやお父さん、おじいちゃん、おばあちゃんのことを大事にしたいと思いました。自分だけのことを考えずに、ちゃんと相手の気持ちや相手のことを考えられる自分になりたいです。
- ・ 思春期、反抗期になると、怒ることがよく分かりました。それに、親の言うことを聞かなかったり、親に言い返したり、無視したり、そんなことが起こるんだなあと思いました。でも、その時、親もストレスを感じると分かりました。反抗期は、みんな起こると思うので、しょうがないことだから、そんな時期があるんだなあと思いました。だけど、これは悪いことではないと思います。
- ・ 私は、朝起きて、トイレへ行くけど、大便がなかなか出ません。このごろは、学校に朝来た時に行きたくなくなってしまいます。なので、これからは朝、もう少し早く起きて、トイレでゆっくり座って出したいです。

(2) 6年生の感想

- ・ 私は、山本先生の話聞いて、お母さんやお父さんに反抗する時が誰にでもあるということが分かりました。でも、やっていいこととやってはいけないことを区別するのも、とても大切なことだと思います。あと、お母さんやお父さんに反抗するということは自分の意見をしっかりもっているからなのかなあと思いました。
- ・ 山本先生の話聞いて、一番分かったのは、親の気持ちです。私は、最近、親に反抗してしまう時があります。山本先生は、私の反抗してしまう気持ちも分かっている、もちろん、親のイライラする怒る気持ちも分かっていました。私は、親の気持ちが分かったので、今度は、少しでも反抗しようという気持ちをおさえるよう気をつけたいなと思いました。また、他にも思春期の事なども教えてもらったり、

手遊びをしたりして、自分たちが成長していくことを実感しました。

- ・ 反抗期や思春期などの心の変化や体の変化についての話が心に残りました。体と心もだんだん成長してくんだなと思いました。体や心の変化が起こっても受け止めていこうと思いました。
- ・ 私は、先生の話聞いていて「自分も反抗期かも」と思いました。それは、親に怒られた時、口ごたえする事が多くなったのでそうかなと思いました。もし、これから家などで気に入らないことがあったとしても、物に当たったり、人に当たったりしないようにしたいと思いました。
- ・ これからは、早く寝て、早く起きて、ご飯を食べる時間を増やして、トイレに行く時間も作って、規則正しい生活をしていきたいです。
- ・ 思春期や反抗期の事をよく知れてよかったけど、反抗期のことについては、どうすれば反抗期がなおるのかなどの点についてもうちょっと知りたかったなあと思いました。
- ・ 手をつないでてゆるめたら、どっかに行きたい。強めると離れたくないという気持ちが分かるという事が知れてうれしかったです。また、こんな話をどんどん聞きたいです。

(3) 教職員の感想

- ・ 子どもたちとかかわる話だったので、一時間があっという間に過ぎた。
- ・ 導入の骨を見て、みんなが安心して自由に考えを言える……ということのよさ、大切さを実感できたのが良かったです。反抗期の心の問題は、家庭や学校の様子もふまえて取り上げるといいと思います。
- ・ 子どもや保護者に分かりやすい内容であった。教職員の中には、少し懸念する声もあった。
- ・ 一般的には5・6年生の実態に合っているのだが、本校の実態に全く合っていなかった。勘違いをする子が多いのではないか。
- ・ 保護者に話す内容であり、子どもにする内容の話ではないと感じた。手の内を明かさないう指導すべき事もあり、今後、かえって指導しにくくなることも含まれていたと思う。
- ・ 児童の実態からはかけ離れていたと感じる。思春期ではあるが、精神的にそこまで成長しきれていない児童が多く、勘違いする恐れがある。

(4) 保護者の感想

- ・ 先生の話が分かりやすく、一緒に参加している感じが良かった。

- ・ 保護者としては、昨年の講演からの流れに沿って、お話をくださったので、大変分かりやすく良かった。楽しく分かりやすくとても良かった。
- ・ 先生の実生活の体験の話も良い。早くしなさいという言葉はできるだけ使いたくないけれど……。男の子を育てたことがないので、男の子の孫育ての参考になります。
- ・ 思春期に入る時の自分の経験と長女の様子を思い出し、納得した次第です。ストレスをためずに和やかに過ごせればよいなと思いました。
- ・ 生活リズムの大切さを日頃から言っていたので、山本先生の話で再確認。高学年の思春期に入らないかの微妙な年頃、親の話を受けないのも仕方がないかと納得。
- ・ 先生の話にユーモアがあり、話に耳を傾ける瞬間が多々あり、楽しかったです。中には、下記のような反応も見られた。
- ・ 子どもに対して内容的にどうかだろうか？あまり子どもが興味を示していなかったように思う。自分自身があまり内容を理解できていなかったために、帰ってから子どもに話せていない。

(5) 感想から見えてきたこと

導入で、骨を見せ、何の動物の骨かあてる質問をした。子どもや保護者が、様々な予想を発表する中、ある児童が「ブタ」と答えた時「まさか、そんな訳ないじゃない」という笑いが会場で起きた。しかし、それが正解と分かると「よく分かったなあ、すごい！」という反応に変わり、笑われた児童もうれしそうであった。この導入から、自分の考えを発表してもいいんだという雰囲気が会場に漂い和むことができた。また、初めて骨を見る児童が多く、興味を引いたようである。

全員の感想を読んでも、昨年、山本の講演を聞いた5年生（現在の6年生）の感想が、変化していることに気付いた。それは、5年の時は「自分もいつか反抗期が来ることが分かった」という未来形で書かれてあったのが、今年は「いらいらしたり、物に当たったりするのは、反抗期だからというのが分かった」といった現在進行形に変わっていたことである。また、5年生の感想からは、現在の6年生が、昨年、書いていた内容が書かれてあったので、心の発達段階がよく分かった。また、両学年に共通していたのは次の3つであった。

- ① 就寝・起床時刻を早くしたい。
- ② 朝の排便習慣を身に付けたい。
- ③ 相手のことを考えて言葉を使いたい。

上記以外でも、6年生においては、皮膚感覚につい

ての感想が見られ、人との接触・接し方について敏感になっているのではないかと思った。

教職員・保護者の感想には、賛否両論あったが、全体的には良かったという反応が多かった。

第三章 保健だよりの新たな展開

昨年に引き続き、今年度も児童のイラストを取り入れた保健だよりを作成している。2年目の今年度は「イラストはないですか？」と聞きに来た児童に「今月号は終わったからないよ」と答えると「早く次のを作ってください」という声が聞こえるようになった。養護教諭が作成していた時には、聞かれなかった声である。また、このようなこともあった。学級において厳しく指導されている2名の女子児童がいた。その2人が、保健室に来室して騒いだため、学年主任に指導方法を相談した。すると「叱られてもいいけん、こっちを見てほしいのかも。でも、本当は認めてくれる存在がほしいんかもしれないね」という助言をもらった。その日、帰宅してから、これまでの対応を振り返った。そして、騒がしい2人が、保健室に入ったことを養護教諭として受け入れていなかったことに気付き反省した。その翌日も、2人が来室してきたため、しばらく様子を見てみると、イラストを描いたノートを広げ見せてくれた。それを保健だよりに載せたいと言うと「ちょっと待って！もう少し、うまく描くけん」と言い、静かに、そして、真剣にイラストを描き始めたのである。それまでは「保健室でこんなに騒いでいたら、しんどい子が入ってこれないでしょう？」と言っても、態度を変えなかった2人がである。それ以来、来室しては黙々とイラストを描き、こちらの指導に対しても、少し時間はかかるが、きちんと応えるようになってきた。この2人から、保健だよりのイラストスペースが、教室に居づらさを抱えた児童にとっては、居場所になることもあるのだと実感することができた。

さらに、イラストだけではなく、健康委員会が調べたことを載せたいと感じるようになった。そうすることで、健康委員会の自信と意欲につながると考えたからである。そこで、う歯集会に向けて、いろいろな飲み物に歯を浸けておくと、どうなるかという実験を行うことにした。

記事を書けるにあたっては、まず、実験したい飲み物を話し合い、コーラ・お茶・牛乳の3つに決めた。牛乳が出たのは意外だったので理由を聞いてみると、毎日、給食で飲んでいるからという返答があった。やはり、身近にあるものに興味を引かれることをここでも実感することができた。次に、それぞれの液体に、歯科医からもらった歯を2週間浸け、歯を取り出して、

見たり触ったりしてどのように変化したか、気付いたことを記入するという手順で行った。その結果、コーラに浸けていた歯は黒く、柔らかくなり、他のものはあまり変わらなかったことが分かった。この実験を通して、歯をみがくことの大切さを触覚や視覚から学ぶことができたようである。う歯集会では、これらのことをクイズにして出題した。発表では、歯が柔らかくなったことを「ぶよぶよになった」等、分かりやすい表現で堂々と伝えることができた。体験を通して理解すると自信がもてるため大きな声で発表できるし、相手により分かりやすい言葉で伝えられることを学んだ。また、集会後は、保健だよりに、実験結果と歯みがきの大切さやコツを紹介したものを載せて事後指導につなげた。今後も、山本から学んだ「書くことは考えること」「他者からの学び」を目標とした保健だよりの作成に向けて実践を重ねていきたい。

おわりに

子どもたちの健康を守り育てるために、本校に転任後、次の2点について取り組んできた。

- ① 1年目は、学校全体で取り組んでいけるよう、子どもの実態に応じた健康問題の発見と学校保健委員会の組織づくりに努めたこと。
- ② 2年目は、健康委員会活動のさらなる活性化を図り、学校全体の健康認識を高めることを心がけたこと。

ここで、その成果を述べる。

学校保健委員会の組織づくりのためには、目の前の子どもたちが抱える健康問題を発見することは有効であった。それは、教職員・児童・保護者が、身近に感じるため、解決に向けての必要性を感じるからである。また、健康委員会活動の活性化を図ることは、学校全体の健康認識を高めるのに有効であった。このことは、委員会活動の枠を超えた保健だよりの作成や児童の言動の変化からも分かるであろう。

本校のように、子どもの実態に応じた健康問題をテーマに掲げ、健康委員会活動を学校保健委員会という組織の中に組み入れる取組は、第56回日本学校保健

学会³⁾においても報告されている。

今回、大学の研究者と養護教諭が、協働研究を行うことで、次のような利点があった。

- ① 大学の研究者による講演を通して、健康問題についての専門的な知識を楽しく理解させることができること。
- ② 養護教諭自身の子ども観、保健だより観が変わり、新たな展開を生み出すことができること。
- ③ ②によって、養護教諭の子どもに対する対応が変わったことで、子どもも変わることができること。
- ④ 研究の方針について、軌道修正をしながら、確かな実践ができること。

2年間の取組を通して、今後、取り組んでいきたい課題を1点述べる。

- ① 子どもたちとの「対話による保健だより」の作成はできつつあるが、保護者となると難しい。保護者との「架け橋になる保健だより」の作成に向けて取り組みたい。

本研究をまとめるにあたって、金本和樹校長をはじめ、高浜小学校の教職員の理解と協力に謝意を表したい。

参考文献

- 1) 山本万喜雄・東幸恵「高浜小学校における健康教育の実践研究」
愛媛大学教育実践総合センター紀要 第27号
2009
- 2) 東幸恵「子どもたちが主役の学校保健委員会を目指して」
第23回愛媛県学校保健会保健主事研修会資料
2009
- 3) 新谷チヨ子「小学校における学校保健委員会活動の取り組み」
第56回日本学校保健学会 2009